

## 【座談会ファシリテーターの視点から】

# 学ぶ意義を生徒が実感できるために 社会とつながる「リアルな学び」へ

隠岐島前高校時代には教育魅力化プロジェクトを教員として現場で推進し、現在は島根大学で地域連携型教育や教育魅力化を専門分野として研究する中村准教授に、座談会でファシリテーターを務める中で見えてきた、学校が地域社会に開く意義についてご寄稿いただきました。



島根大学教職大学院 准教授  
中村 怜詞

なかむら・さとし ● 前島根県立隠岐島前高校教諭。2013年度から同校の教育魅力化プロジェクトに関わる。キャリア教育主任として体験型キャリア教育の全体を企画・運営、総合的な探究の時間「夢探究」や「地域学」などの授業を担当。文部科学省「2019年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業 企画評価会議 地域魅力化型企画評価部会」協力者。2018年4月より現職。『地域協働による高校魅力化ガイド～社会に開かれた教育課程をつくる～』共著 岩波書店(2019年6月)

## 社会とつながる「真正の学び」が 学びの価値を実感させる

私たち大人は、より良い未来社会を創造したり、目の前に立ちはだかる問題を解決しながら生き抜いていくために、どのような力が必要なのかをいつ自覚したのでしょうか。恐らく多くの人は大人になって、実際に目の前にある状況を突破しなければならぬ場面になって初めて自覚したことと思います。そして「もっと勉強しておけば良かった」「もっと多様な経験を積んでくれば良かった」と後悔することもあります。この感覚を高校生の時に抱くことができれば、高校や大学時代の学びは異なつたのではないのでしょうか。自分が何を実現したいのか、そのためにどんな力が必要なのかは、

実際に地域社会の文脈の中に身を置くことで考えることができます。

地域問題解決型の探究学習を行うと、意欲的な生徒とそうでない生徒がいます。両者の差は何でしょうか。探究学習で取り組む分野と生徒の興味・関心が重なれば、生徒は意欲的に取り組むことができます。一方で、学校から与えられた探究のフィールドが狭く、生徒の知的好奇心が弱いと、両者は重なることができません。学校と社会を接続することの意義は、生徒が取り組むことができる学びのフィールドを広げることです(図参照)。

同時に、このことは生徒の知的好奇心を育むことにも寄与します。多様な社会文化体験を積み、丁寧に振り返りをすれば、自分が大切にしたい価値観に気づいたり、自分が夢中にな

れるものを自覚できるようになります。

最近、高校教育の世界でも「真正の学び」という言葉が広がっています。

「真正の学び」の要素は3つあり、①構成的な知識習得、②鍛錬された探究、③日常や社会とつながるリアルな学び(学びの学校外での価値)です<sup>※1</sup>。この中で③のリアルな学びに焦点をあてるなら、地域社会をフィールドにして学ぶことの価値は、社会に直接的に接続された学びを経験することであり、「何のために学んでいるのか」を生徒自身が実感できることです。

高校生はどこか今住んでいる地域に対して繋がっている感覚が欠けていて、地域の問題にリアリティーを感じにくくなっているのかもしれない。生徒が地域の人と関わり、過ごす中で地域と自分の繋がりを取り戻すことが

できたとき、生徒は地域の問題に当事者意識をもてるようになります。

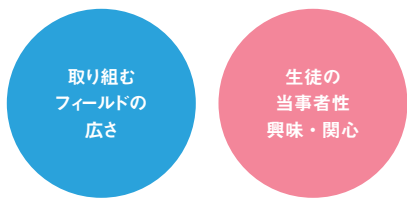
## 学びを地域社会に開くことで 期待できる3つの教育効果

学校が地域社会と連携して学びのフィールドをつくり上げたとき、そこには3つの教育効果が表れるのではないかと思います。

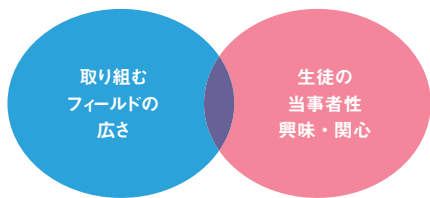
1つ目はコンピテンシーの育成です。多くの研究の中で言われている通り、学びは状況や文脈に依存しており、他の場面に簡単には転移しません。数学などで論理的思考力を培ったとしても、日常生活で発揮されるかどうかは別問題です。人間関係形成力について教室で論理的に教えられていたとしても、実際に険悪な相手を目の前にしたら壊れた人間関係を修復



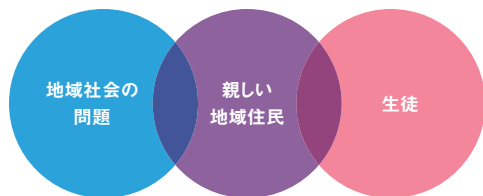
生徒の主体的な活動にはフィールドの充実と  
生徒の当事者意識や興味・関心との重なりが重要



探究のフィールドを広げ、生徒の主体性を育む



関わる人を通して問題の当事者となる



できるかはわかりません。望ましいと思われる行動特性をその場その場で発揮できるようにするためには、生々しい現実の中でその力を発揮できる練習をし続けることが重要になります。

2つ目は**社会関係資本の蓄積**です。大阪大学の志水宏吉先生の研究の中で、経済資本や文化資本だけでなく、社会関係資本(豊かな人間関係)も学力との相関があることが明らかにされました<sup>※1</sup>。学校には多様な生徒が集まっています。経済的に恵まれていなかったり、家に本が少なかったり、いつの間にか自尊心を傷つけられていたり、知的好奇心を育まれにくい環境で育ってきた人もいます。そのような生徒たちにとって、友人と協働し、大

人と対話する中で形成していく人間関係は、重要な資本であり、彼らの心に進んでいく力を与えます。

3つ目は、**バランスの取れた人格形成**です。生徒は目の前の相手によって顔を使い分けます。友達に見せる顔、先生に見せる顔、親に見せる顔、どれも異なっていてどれも本当の顔です。人は自分ひとりで自己を形成することができません。他者と関わり、自分の行動を意味づけられる中で自己の輪郭が縁どられていきます。多様な人と関わり、多様な顔を表に出すことができた生徒は、安定した自己を形成することができます。反対に、非常に限られた人間関係の中で育った生徒は、特定の顔しか表に出すことが

高校生にとって最高のロールモデルは学び続ける大人の姿

できず、意味づけられる自己が偏るために、不安定な存在になります<sup>※2</sup>。地域の自治会や子ども会など、地域社会の中で多様な人と関わる機会が失われている現在では、教育活動の中で多様な他者と関わる機会があること自体に価値があるのです。

では、これからの学校に求められる学びとは？ 大きく3つあります。①横断的な学び、②個別化の推進、③生徒を子ども扱いしないこと、です。これらのうち横断的な学びや個別化の推進の重要性は多くのメディアで取り上げられているので割愛します。3つ目の「生徒を子ども扱いしない」で大切なことは「意思決定のプロセスに生徒が関わる」ということと、「信じて任せる」ということです。自分で考えて決めたことには当事者意識が伴います。生徒たちが自分の人生のハンドルを自分が握っていることを自覚するためには、自分で決めて、自分で行動する経験が欠かせません。そして日常的に自分で考えて判断して行動する機会を生徒がもつためには、教師が物事を決めるプロセスを開くか、手放す必要があります。例えば当たり前に使われているチャイ

ムなども、鳴らすのかどうかから生徒たちと一緒に考え、生徒たちに決定権を委ねても良いのではないのでしょうか。

私は高校生と大人で、能力に差はないと思っています。大人の方が上手にできることが多いのは、何度も失敗しながらやってきたからです。ICTも思考ツールも、最初から上手に使いこなせる人はいません。使っているうちにできるようになっていくだけのことです。「私たち大人でも難しいことが生徒にできるのだろうか」と考えずに、彼らが自由に挑戦できる環境を用意してあげることが我々大人の役割です。大人が使ったことがないからという理由だけで及び腰になる必要はありません。一緒に学びながらできることを増やしていけば良いのです。学び続ける大人の姿は、高校生にとって最高のロールモデルになります。

今回の座談会では「リアルな学び」というキーワードが何度も出ました。「社会に開かれた教育課程」という概念は我々の教育経験の中にはほとんどありません。そのため、最初から良いものを創ることは簡単ではありません。「失敗バンザイ」の気持ちが大切です。大人も経験から学んでいくのです。創り上げる過程で経験できる探究的な学びを一緒に楽しみましょう！

※1) 参考文献 フレッド・M・ニューマン「真正の学び/学力」渡部竜也、堀田論訳 春風社  
 ※2) 参考文献 志水宏吉「「つながり格差」が学力格差を生む」 亜紀書房  
 ※3) 参考文献 肥後功一「通じ合うことの心理臨床: 保育・教育のための臨床コミュニケーション論」 同成社